

東京で警備召集受けること実に九回に及びました。九人兄弟の長男が抑留、二男三男も戦後病死し、五男が逆縁で家を継ぎ、六男は内閣印刷局に勤め、恩欠者の賞状の印刷をやっていました。が最近定年退職しました。七、八男は健在です。歩兵第八十八連隊の戦友会の誘いを受けて参加しておりますが、隣の大隊の集まりです。

敗戦を外地で味わった悲惨さ

石川県 惣田 甚郎

私は、関東防衛軍経理部奉天出張所勤務であった昭和二十(一九四五)年八月九日、暗号書宰領の出張から帰ったが、もう夜になってしまった。出張予定がもう一日あるので翌日申告すればよいのであるが、ソ連軍が日ロ不可侵条約を無視して国境を越え満州領内に侵入してきたため早速経理部へ行った。

営門へ入ろうとしたらいきなり歩哨が誰何するので

びっくりして飛び上がりそうであった。私は何も思わず「俺だ、庶務の惣田だ」と言うと、歩哨から「ご苦労さん」の返事が返ってきた。完全軍装の物々しい姿であった。普断なら軽装しているのを、ソ連参戦によって厳重な警戒である。

八月十五日に「重大放送がある」ということで各々の事務所集合してラジオを聞いたが雑音ではっきりしない。誰言うともなく「終戦の玉音放送」であることが解ってきた。満州に居れば、敗戦など夢にも思わない状況であったのに、一方的にソ連軍が一日一日と奉天(今の瀋陽)へと迫って来る。

ソ連軍との戦闘準備で大忙しであった。司令部からの命令で、部隊の解散ということになった。そうなる。と陸軍官舎に居るのが危険なので、早速官舎に帰り、引越し準備をして、他の安全な場所へと移動した。

ソ連軍との交戦を覚悟で、各部隊の婦女子を日本の本土へ帰すため、釜山へ向け、八月十四日臨時列車(貨物列車)で奉天を出発させたが、北緯三十八度線で止められ平壤まで引き戻されて、婦女子が平壤の小

学校の講堂に詰め込まれてしまった。

食料として、一日におむすび一個の支給だけなので、皆町へ出て買い食いをしたため、平壤の物価が上がるとの理由で所持金が全部没収され、貴金屬や医薬品も皆取り上げられたために難民生活が始まった。病人が出ては薬もなく、医者もいないし、金も無いから皆途方に暮れて奉天に連絡に来た。

奉天では、各部隊連絡を取り合って、金と薬を出し合い平壤の家族の救済に乗り出した。この救済の世話をしていた青木技手、早尻技手が私と同郷の新谷時男君（石川県富来町出身）の二人を選んで、「君達は安東行き疎開家族の救済のため、一働きして欲しい」とのことだった。私はこの命がけの仕事を悲壮な覚悟で引き受けた。

終戦後は、日本人の旅行禁止ということになっていった。安東までどうして行こうかと、大変心配になり、中国服を準備するやら汽車の時間を調べるやら、安東までの地理等研究して準備が出来た。

第一次に集まった資金が三十万円余り（当時は百円

札しかなかった）三百枚の紙幣を二人で分けて、運ぶ方法を思案した。一番安全な場所として足の膝下に巻き、その上に巻脚絆を巻いて、中国服のズボンをはいて中国服を着て、中国人に変装して奉天駅に向かった。

安東駅に行く列車を調べ、客車は危険だから機関車の石炭の上に乗った。石炭の粉のついた手で顔をなで、黒い顔に擬装した。石炭車に数人の中国人が乗っていたので一緒に安東に向かった。汽車は一路南へ南へと走る。真夏であったから外でも苦にならなかった。

途中、機関車の給水で停車したので、石炭車から降りて客車に乗った。一番端の空席に座ったが気が気ではない。一身上の危険と平壤に居るたくさんの方々に一刻も早く資金と薬を届けなければならない重大なる任務があるからである。

途中、鶏冠山に長く止まったので、ホームに出てみたら朝鮮からの引き揚げの臨時列車が来るとのこと、しばらくしたら発車するとの情報を得た。もしか

したら奉天部隊関係の家族ではないのかと、ホームで待つて調べたら関係のない団体であったから汽車に乗りに込んだ。新谷君と小声で疎開家族のことや、安東に着いてからのことなど話し合っていたところ、網棚の上に寝ていた八路軍の将校が降りて来て、重慶軍のスパイではないかとの嫌疑で鳳凰城で下車させられ、八路軍の駐屯地部隊に引き渡され、元日本人小学校の三階の一室に監禁されてしまった。廊下には歩哨が交替に立っていた。

ここで一夜を明かしたが、何もしないのに銃殺になるのではないかと心配した。せめていつ、どこで死んだくらい故郷に知らせたいものだと思ったがどうにもならない。窓の下の道を買いい物に行く日本人の奥さんが通っていくが、連絡のしようが無い。その後、間もなく取り調べのために、中国人の将校と通訳の日本人の下士官が入ってきた。初めは、大工であるが終戦で仕事もなくなり、日本に帰る道中であると八路軍の将校に伝えてもらった。その後日本人下士官に本当のことを打ち明け、経理部軍属で平壤疎開の家族救済を

するといふ話をして上官にうまく取り計らってもらえるようお願いして取り調べも終わった。数時間後、無事釈放になり命拾いをした。

無事、安東に着いて駅近くの日本人宅に一時泊して住む所や事務所を探した。鴨緑江近くに一軒の空き家を見付け、ここに連絡事務所兼居住を定めて奉天と平壤との連絡拠点とした。奉天の部隊からも連絡員が来た。平壤へどうして届けようか？ 鴨緑江の橋に行つてソ連の歩哨に連絡しても通してくれない。新義州の駐屯地司令宿舎に面会を申し出たがそれも駄目だった。

朝鮮人を密航させるより外にない。一人の朝鮮人が見つかった。この人に前金を渡して家族を引き取り、人質として預かった。三十万円という当時の大金を持たすのだから仕方なかった。

それから、連絡事項や家族の手紙等を奉天に届けるため、二人で一度奉天に帰ることにした。夜、奉天に着いた。九時頃であったが駅には人がまばらで、ロシア兵ばかり沢山いた。宿舎に着いたら皆がよく来られ

たと驚いている。

今日はロシアの革命記念日で、何があっても無礼講で、日本人は外出禁止になっているとのことだと聞いて驚いた。安東へ出発当時、一緒にいた者が誰もいない。未成年と女ばかりと聞いたら、皆ソ連に連れられていかれたとのことだった。

連絡する事項等は全部終わり、また安東へ向かった。敗戦ということで少しの安心も出来ない。今までは、軍属で大手を振って歩いていたが、今は小さくなって、隠れて歩く状態で、敗戦ということをつくづく感じられ、戦争の悲惨さが身に染みてきた。

再び安東に着いて、また連絡等の仕事に就いていた。今までに奉天から送られた沢山の資金が、途中で何回も中国人に取られたり、紛失して安東まで届かないし、犠牲者も出た。

沢山の資金が事務所宛に送られるため、八路军軍から重慶軍の工作資金ではないかとの嫌疑で夜中に一斉捜査を受け、連絡員全員が逮捕された。そして、元の安東刑務所に入れられた。三日経っても取り調べ一つな

く、皆が恐ろしくて早く調べて帰してくれと懇願したら、一週間ほどして「出て来い」ということで出たら、八路军の陣地造りの労役だった。敗戦国の国民故にどうにもならなかった。作業現場は、ソ連が持っていつてしまった鉄路の下の枕木を山の上まで運ぶ仕事である。広軌道の線路の枕木だから日本の枕木より太くて長い、しかも土の中から掘り上げたばかりで物凄く重く、それを山の上まで運ぶのだから大変苦勞した。山の上には八路军の兵隊と、中国人、朝鮮人の勞務者である。我々連絡員は皆軍人であるから、彼等の造っている陣地にけちをつけ、造り方を指導したら、日本人が上の仕事をやるようになった。

山の上で一服吸おうと思っても誰もマッチを持っていない。そこで匪賊討伐で経験した火起こしを思い出し、中国服から綿を取り出し、縄のようにして細かい芯を作り、その上に綿を巻いてスコップの柄でこすり火を起こした。この様子を見ていて八路军、中国人、朝鮮人が、一様に日本人の知恵に感心していた。

その火で皆が一緒に一服吸った。久しぶりの一服

で、大変おいしかった。この時だけは、勝者も敗者も無い楽しいひとときであった。一週間ほどで陣地も出来上がり無事釈放になった。

その後、平壤の疎開団体が無事二十八度線を通じたとの連絡が安東の事務所に届いた。これで我々の任務が一応終わったので、早く奉天に帰って報告せねばならない。そのころは梅雨期で毎日雨であった。鴨緑江が増水し、安東の街が一時浸水して大騒ぎした。その夜中、七人の連絡員が暗闇の市内を通り抜け、奉天に向けて徒歩で行く覚悟であった。携帯のにぎり飯も蒸し暑い時で一日しかもたず、二日目からの食事が無かった。朝早く町へ売りに行く農家の人のところへ、山から駆け下りて、胡瓜、まくわ瓜、卵等、生で食べられるもの全部安く引き取り、山へ上り山づたいに歩く、または高粱畑や川の中と、人目を避け、夜は鉄道線路を歩き続けた。一軒家の農家を起こして一食を乞うこともあった。汽車の音を聞き、星を見ながらの行動だった。

ここは寝心地が良いところだと思って寝たら、目が

醒めると土饅頭の墓地であったこともある。朝、下の部落を見ると、部落の入り口に沢山の人がいる。どうも日本人の引揚者らしい。安東方面から奉天に向かう団体だ。女、子どももいる。部落民が持ち物を奪い取っている様子である。我々七人は見るに見兼ねて、急いで山を下り近づいて中国人を追い払い、この団体と合流して奉天に行くことにした。

道案内三人を連れ山の中に来たとき、皆に木の枝を持たせ、山中で不穏な案内人を追い払った。次の部落にも何人が待ち伏せしていたが、これも追い払い無事通過させた。幾つかの部落を越え、やがて八路军の最前線へ来た。ここで皆に一品ずつ出させ、交渉して第一線を通過することが出来た。

一山越えて重慶軍の最前線へ来た時は、何も要求は無かったが、軍手と石鹼を少し渡したら大変喜んでくれた。そして安平という駅に着いた。ここには各地から来た団体が沢山いた。誰も皆リュックサックは空であった。一緒に来た団体だけが重いリュックサックを持っていた。皆が、我々七人の連絡員に感謝してくれ

たので、我々も嬉しかった。

駅の貨物ホームで、重慶軍の将校の歓迎の言葉があった。「中国との不幸があったが、今後日本人の頭脳と勤勉さと、中国の資源を利用して、互いに手を取り合って世界のために尽くそう」との主旨の挨拶であった。そして、重慶軍の配慮でここから奉天まで車で届けてくれた。